魔法少女リリカルなのはStrikerS～修羅の少年～

光鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～修羅の少年～

【Ｎコード】
Ｎ４４４２Ｘ

【作者名】
光鴉

【あらすじ】
修羅の血を受け継ぐ少年がいた。
その血が引き寄せるのは戦い。
だから少年は戦いを求めて管理局に入る。
そこで少年は修羅として生きていくのだろうか……

第1話（前書き）

どうも、光鴉と言います。

自分は色んな作品に影響を受けやすいので、文体が大きく変わったりする事があるのでそこは注意してください。

また、誤字脱字などのミスがあるのでそこは指摘していただけると助かります。

初投稿なので至らないかとは思いますが、頑張っていこうと思います。

第1話

新暦００７１年、４月２９日。
ミッドチルダ北部にある臨海第８空港の全体が、赤い炎をまとって星空の暗幕を煌々と輝いて照らしていた。
この火災の中救助しようと多くの人間が動いているが、火の勢いが強くてその速度は遅々としている。

空港内部。
熱い空気に包まれたこの空間は息をするだけで辛く、煙を吸い込まないように多くの人が屈んで救助を待っているのだが、一人の少年は何かに誘われるかのように歩いている。死が怖くないのだろうか。
火災による崩壊で不安定な足場を黙々と歩いていく。その足取りは羽のように軽い。

「やれやれ、俺も損な性格をしているな」

その呟きは落ちてきた瓦礫によってかき消された。
だがその瓦礫が落ちていく先に、ここまで歩いてきた目的の存在を見つけたらしく口が三日月に歪む。
何かが通り過ぎて行ったのか、それとも炎で抜けたのか、いくつもの階層に穴が開いており何階か下のフロアに少女が座り込んで……いや、腰を抜かしていた。
少年は命綱もなしに目の前に開いている穴を飛び降り、壁を蹴って勢いを殺しながら少女の傍に着地する。

「だ、誰ですか」
「そんな事はどうだっていいだろ。今はここから出るのが先だ」

救助隊でもない身なりの少年がいきなりやってくれば、少女が名前を聞くのも分かるが少年の言うとおりで、今にも崩れそうな場所にいるのは得策ではない。

「でも私は妹を探さないと！」

「自分を守る力もないのにか？　無駄死にするだけだ」

「他人のあなたに言われたくないです」

少年の言い分を無視して奥に行こうとする少女の上から瓦礫が落ちてきた。だが少女は真剣に妹を探しているらしく、瓦礫が落ちてきている事に気づいていないようだ。

仕方ないな、と呟いて少女の手を引いて抱き寄せる。

急に抱き寄せられて少女が顔を赤くするが、つい先ほどまでいた場所に瓦礫が落ちて青ざめた。

「あ、ありがとうございます」

「仮に妹をあんたが見つけたとしよう、そこであんたは無事にここを出れるのか？　今みたいに危険を回避できないのに」

「それでも私はお姉ちゃんだから妹を、スバルを助けないといけないんです」

どうやってこの少女を説得しようかと考えていると、近くの壁が爆発して出来た穴から綺麗な女性が現れた。

「君達、怪我はない？」

「怪我はないんだけどな、この少女が妹を探すって言うんだよ」

「妹さんの名前を教えてくれるかな？　もしかしたら助かってるかもしれない」

「スバルです。スバル・ナカジマ」

名前を聞くなり女性の目の前にモニターが現れ、オペレーターらしき女性がすでにスバル・ナカジマという少女を保護したと告げる。後は三人でここから出るだけだが、二人の子供を抱えて脱出するのは少し難しいのか女性の顔が曇る。

そんな心を読んだのか少年は少女を女性に押しやり、一人離れた場所へと行く。

「俺よりもその子を先に脱出させてやってくれ。妹を探そうと動き回って沢山煙を吸ってるだろうし」

「君はどうするの？」

「一人でここから出るさ」

無理だ、そう女性が言おうとしたその時、少年は何も着けてない手で壁を殴った。

鈍い音と骨が砕ける音が響くと思ったが、予想に反して逆に壁が砕けた。

「早く出ないと崩壊に巻き込まれるんじゃないか」

少年は振り返らずにただ手を振って砕けた壁の向こうへ歩いていく。

その消え行く背中にもう会えないと思ったか、少女がその背中になげかける。

「あの、また会えますか？　助けてくれたお礼がしたいんです」

「縁があれば会えるだろうが、礼なんて貰う気はない。俺が勝手にした事だからな」

今度こそ少年は消えて行った。

少年が消えて行った後、二人は急いで脱出しながら話す。

「報告しないといけないから名前を教えてくれるかな。あ、私はフェイト・T・ハラオウン」

「ギンガ、ギンガ・ナカジマ。陸士候補生１３歳です」

「未来の同僚だね。さっきのあの子の名前は分かる？」

「ごめんなさい……互いに名乗ってないんです」

「そっか……あの子無茶してないといいんだけど」

あまりギンガを心配させないように努めて明るく言うが、フェイトの心はさっきの少年を心配していた。あの冷静な性格や、壁を砕く力があれば大丈夫かもしれないが、それでも少年が纏う雰囲気が気になってしまう。

ふとギンガの口数が減っている事に気付いた。

「あの子が気になる？」

「ひぇ！？」

図星だったのかギンガが素っ頓狂な悲鳴を上げる。

「そ、その……助けてくれたお礼したいですし」

「ふふ、そういう事にしておこうか」

「フェイトさ～ん……」

顔を赤らめて抗議しようとするギンガが可愛くてまだ弄りたかったが、あまり苛めるのも悪いとフェイトは微笑みながら脱出に専念

する事にした。

第2話（前書き）

前回あんな終わり方をしましたが、今回からは少しの間訓練校の話となります。

訓練校について調べてみたんですが、あまり詳しく見つからなかったので半分以上が自分の考える訓練校といった感じになっております。

では第2話始まります。

第2話

第四陸士訓練校。
人を助ける為、管理局へ入ろうと数多の者が試験という狭き門潜り抜けて今、入学式を行っている。
世界は違えどもありがたいお話というのは長いらしく、うとうとする者、ナンパする者、端末をこっそり開く者と、多種多様な時間の潰し方で乗り切ろうとしている生徒が多い。
ここにあの少年がいた。

（話が長いって言うか、ループしてるって言うか）

どうやらこの長い話に苛立っているらしく、足が地面を叩いている。
サボるか、なんて考えが浮かぶと同時に隣から声をかけられた。

「早く終わってほしいよねー」
「誰かあの口を縫い付ける事が出来ないもんか」
「それは良いね」
「もしくは酸欠で倒れないか」

教員が二人の方を見るよりも早く、二人は口を閉じた。そのおかげで話しているのが気付かれなかったが、二人の隣でうたた寝していた者が怒られた。
心の中で怒られた者に謝る。
それから二人は教員の目を盗み、ありがたい話が終わるまで会話していた。
解散した後、訓練着に着替えて一時間後に集合とのお達しが出たので、自分に割り当てられた部屋に行こうとした少年の腕をさっき

の少女が掴む。

「あたしはスバル・ナカジマ。君の名前を教えて？」

「俺はアユム、アユム・ハバだ」

「じゃあアユム、また後でねー」

それだけ言うとスバルは人ごみの中に消えて行った。

見た目どおりの騒がしさに苦笑したアユムの心に、何かが引っかかったような気がする。スバルのファミリーネームであるナカジマ、どこかでしかも最近聞いたような気があるはずなのだが思い出せない。

思い出せないなら無理に思い出す必要はない、と考え今度こそ自分の部屋に向かう。

寮では基本チームワークを高める為に自分のパートナーと二人で暮らすのだが、今年は男子の入校者数が奇数だった為、アユムは一人で使う事となった。アユムだけを三人一組にしようという話も上がったそうだが、さすがに一部屋に三人は流石に狭いという事で特例で一人となった。

パートナーについては偶然にも女子が奇数という事で、余った女子と組むことになったのだが気が重い。他の男子生徒からのやっかみを受けそうだ。

二人で丁度いい大きさの部屋は、荷物の少ないアユムにとっては贅沢すぎる広さがあった。

前以て送っておいた荷物から支給された訓練着に着替え、集合場所に行く。

まだ時間が沢山あるからかアユム以外誰も来ていない。

『早く来すぎだアユム。時間までまだ四十分もある』

「あのまま部屋にいた眠っちまうよ。だから早く来たんだ」

右腕に着けられた腕輪状のデバイスが口がないのにため息を吐いた。名前は八幡。ハバの家に代々受け継がれてきたデバイスだからか、多少年寄り臭い。

『ではどう時間を潰すのだ』

「走りこみでもするさ」

そう言うなりアユムはグラウンドを走り出した。最初はウォームアップも兼ねてゆっくり、次第に速く。

ギアをトップに入れるか入れないかのとこで、教員達が集まり出したので速度を緩やかに落として心拍を正常に戻す。

止まって一息つくと、教員が少女を一人連れてきた。

「ハバ、お前のパートナーを連れてきた」

「レオーネ・ラバックよ。よろしくね」

「アユム・ハバだ」

これからの訓練をともにするパートナーに対する礼儀として、握手を申し込んだのだがレオーネはアユムの手を握らず引き寄せ、その頬に熱い口付けをした。

生徒達だけでなく教員達も冷やかしの口笛を吹く。

「あなたは良い匂いがするのね。気に入ったわ」

なんだか危なそうな奴に目を付けられた、と思うアユムであった。

最初の訓練はラン&シフトという、障害突破した後にフラッグの位置で陣形展開という訓練だった。
パートナーと息を合わせるのが目的の訓練なのだろうが、たいていの者が今日いきなりパートナーを組んだからぎこちないながらもクリアしていく。

「三十二……セット！」

どうやら次はスバルの組が出番らしい。
頑張れ、と心の中で思うアユムだったがその反面理性が無理と告げていた。見るからにスバルが必要以上に力んでおり、パートナーの事など頭の中から追い出してしまっているのが分かる。

「ゴー！」

教員の合図でスバルが溜めていた力を一気に解放する。
その力はまるでトップギアに入ったトラックのようで、スタート位置を抉り、力を解放した余波でパートナーの子は倒れ、自分のみ展開場所に着いてしまった。
これが個人訓練ならその爆発力を褒める所だろうが、これはパートナーありきの訓練故に教員に怒られてしまう。連帯責任としてパートナーも怒られているのは少し可愛そうだ。
そんなスバルを見てアユムは楽しそうに笑う。面白い奴と知り合いになったものだと。

「あら、アユムはあんな子が好きなのかしら？」
「ただ友達を見ていただけだ。そんな事より俺達の番までもう少しだから並んでおこうぜ」
「誤魔化す気ね。ふふふ、そういう事にしといてあげる」

人の話をまったくもって聞かない性格のようだ。

「ちなみにレオーネは前衛と後衛のどっちだ？　一応分かるがそのデバイスを見てると嫌な予感しかしないんだけど」

レオーネが右手に持っている、と言うよりも右手に付けているロッ〇バスターのような、茶色い六角形筒の形をしたデバイス。さながらそれは核融合を操る程度の能力を持つあの鴉の制御棒。これでスペルカードなんて持っていたら完全にあの鴉である。

「メガフレアとかとか言ったら、お前をバハムー子と言う」

「大丈夫よ。言ったとしても、“うにゅう～”ぐらいだから」

「十分地獄鴉だよな」

どうやらデバイスの元ネタはあの地霊に住む鴉らしい。

そんな馬鹿な会話をしていると二人の番になったらしく、スタート位置に慌てて着く。そして教員の合図でスタート。

まずは前衛であるアユムが先行して現れる障害物を弾き、死角から現れる障害物はレオーネが弾いて進んで行く。今日始めてのコンビとはいえ二人の息は合っており、なかなかの速度でフラッグ位置で展開に成功した。

「どうやら私達の相性は良いみたいね」

「まあこれぐらいクリア出来なかったら後が困るからな」

「ふふ、エスコートはお願いねナイトさん」

先に行こうとするアユムの腕にレオーネが自分の腕を絡め、その豊満な胸が押し当てられる。そんな光景を見て周囲の男達が涙していたとか、していなかったとか。

第2話（後書き）

タグに“修羅の門”と入っているのに、「あれ、陸奥じゃないの？」と思う方がいるかもしれませんが、主人公を陸奥にしてしまうと修羅の門の方と整合が取れなくなってしまうので、主人公は陸奥ではありません。

じゃあ「ハバって何だよ」と思うでしょうが、そこに関しては後々出てきますのでしばらくは伏線とさせてください。

そしてオリキャラその2のレオーネ。性格こそ違いますが、元ネタはあの同人弾幕ゲーに出てくるあの鴉です。制御棒って書いちゃったし。

こいつは途中離脱しないので、こいつの動向とかも気にしてもらえれば嬉しいなぁ。

あんな分かれ方したのにギンガはいつになったら出るんでしょうね。

第3話

訓練校に入ってから一ヶ月の時間が過ぎた。
一ヶ月もの時間が経てばパートナーとも上手くやっていけるようになり、息を合わせるのは入校の時と比べれば格段楽なはずだが、今日もスバルは失敗をしてしまった。
ある切欠が元で管理局に憧れ、憧れに少しでも近づきたく無茶して入ったから他の者よりも遅れている。それが原因で足を引っ張り、パートナーに怒られながらも何とかマシになりつつはあるが、まだまだ目指す先は遠い。
あの人と同じ場所に立ちたい。
そんな思いを胸に今日も一人隠れて訓練をする。パートナーと一緒に自主訓練をしているが、それでも足りないと思い、こっそりと寮を抜け出して訓練をすると決めたのだ。
まずはシューティングアーツという戦闘スタイルの確認、次に魔法の訓練。
シューティングアーツに関しては母と姉がやっていたのを小さい頃に見ていたので、それを思い出しながら体に刻み込んでいくのだが、劣化してしまう記憶を元にしている為どうしても我流になりつつある。
次に魔法の訓練だがスバルが魔法を覚え始めたのは約一年前、と最近すぎるので基礎をひたすらこなしていくしかない。
休憩なしで一時間通しでやっていると流石に疲れる。切り株に腰掛け、体温が急に下がらないようタオルで汗を拭いていたら正面から何かが飛んできた。スポーツドリンクだ。
「頑張るのはいいけど、水分補給とか考えておけよ」
闇からアユムが笑いながら出てきた。今の言葉からするにスバル

が一人訓練しているのを知り、わざわざ差し入れにドリンクを持って来てくれたのだろう。

「ありがと。ちょうど今持ってくるのを忘れたな、って思ってたとこなの」

「持ってきて正解だった訳だ」

「アユムはいつからあたしの訓練を見ていたの？　気配とかあんまり感じなかったけど」

「お前の訓練の邪魔にならないよう離れて見てたからな」

そんな事しなくてもいいのに、と思ったが飲み込む。もしもそう言ってしまえばアユムの配慮を無下にしてしまう、と少ない頭で感じた。

ドリンクのお金を渡そうと一応持ってきた財布をあさるが、つい先日買い物をしたばかりで財布の中が空だというのに気付く。

「あ、明日ちゃんと返すから」

「気にしないでいいって。俺が勝手にしてんだから」

「でもそれじゃ悪いよ。……やっぱりお金を払う」

「じゃあ金を払う代わりに俺と戦え、スバル。シューティングアーツと戦った事がないから、お前と戦いたい」

ただ一人で格闘技を訓練しても上手くならないだろ、と最後に付け加えた。

一人でするシューティングアーツの訓練に限界を感じていたスバルにとって、アユムの提案はとても魅力的だがどうしても二の足を踏んでしまう。スバルは今でこそ未来に危険が待つ世界に身を置いているが、昔は今のような性格でもなく活発でもなく弱い女の子だった。少しずつ変わってきているとはいえその頃の名残は残っており、あまり積極的にスパーリングとかを出来ないでいる。

そんなスバルの気持ちを理解したのか、アユムが強い口調で言う。
「お前は何でここに来た。誰かを傷付けたくないと思うなら、ここに来る必要はなかったはずだろ。誰かを守る力が欲しいなら、戦って強くなるしかないんだよ。だいたいシューティングアーツは格闘技だろうが」
何でここに来た、その言葉がスバルの心に重く響く。
ただ泣いていた自分が嫌で、強くなりたいってあの時から思ったからここに来たのに、充実している毎日にいつの間にか忘れていたようだ。
思い出した初心を胸に、構える。
「そうだ。それでいい」
出来の悪い生徒がようやく答えを見つけたのを見た教員のように、アユムは笑う。あるいは、まだ戦った事のない相手と戦える事への歓喜からか。
スバルはリボルバーナックルとローラーブーツを装備しているが、アユムは何も装備していない。デバイスを持っているはずなのだが、セットアップして武器を装備を持たないのは何故か。
その答えはすぐに理解する事となる。
目の前にいたはずのアユムが気付くとスバルの後ろに立ち、首筋に手を当てている。左足を軸に回転しつつ右肘で攻撃しようとするスバルだが、肘は空を切り裂くだけでアユムの影すら捕らえきれない。
気配を感じて振り返ると少し離れた所にアユムがいた。
「ほら、攻撃してきな」

スバルの魔力に反応してローラーブーツが力を溜める。
シューティングアーツはローラーブーツ故に踏ん張りが利かないが、高速移動が出来ると言い換える事が出来る。それは他の格闘技にはないメリットであり、上手く使いこなせれば遠距離型とも渡り合える事が出来るのだが、スバルがどこまでそれを理解しているか。
溜めた力が爆発し、ロケットのようにスバルが突っ込んでくるが正直すぎた。いくらスピードがあったとしても、それが直線運動であればかわすのは容易だ。現にアユムは半身になって横を通り過ぎようとするスバルに足を引っ掛けて転ばす。

「早いんだからもっと左右に揺さぶれ」
「こう？」

言われたとおりに左右移動を入れながら迫るが、それが直線によるものだとしたら意味がない。円運動も加えて様々なバリエーションを入れて翻弄しなくては。
本来の目的はスバルと戦う事だったが、いつしかそんな思いは忘れてスバルを鍛える事に専念していた。攻撃を受け、どこが悪いのか、どう改善すればいいのかを瞬時に判断して教える。
アユムの教え方がスバルの気分を高揚させるのか、気付くと休憩を挟まずに二時間ほど特訓をしていた。攻撃に威力がなくなってきたのを見計らって止めることを提案した。風を引かないように汗をしっかりと拭き、失った水分をスポーツドリンクで補う。
一息ついて帰ろうと考えていると、スバルが話しかけてきた。

「アユムはどこのストライクアーツを習得したの？」
「まだ完全に習得した訳じゃないが、俺のは羽々圓明流っていう流派のだ」
「羽々……圓明流？」

聞いた事がない流派だった。ストライクアーツは今では格闘技というよりも、スポーツとして広く知れ渡っているのだが、それで知らないというのはまだ出来立てなのか、無名なのかのどちらかだ。だが、アユムの実力で無名というのはまず有り得ないだろう。ならば後は消去法で出来立てしかないのだが、あの技の深さで出来立てというのも考えにくい。

「スバルが知らなくても無理はない。羽々圓明流は今まで表に出ることはなく、裏でしか存在を明かさなかったからな」

「そんな流派なのに、アユムは出てきてよかったの？」

「力を振るうには裏の方が都合が良かっただけで、別に表に出ても良かった。だけど、戦いになればその身に飼っている物を制御出来なかったから、表に出てこなかったのさ」

「飼っている物？」

「修羅という、戦いにあけくれる化物だ」

それは破壊神であり武神である神の名。常に緒天と戦い闘争にあけくれる鬼神の名。

一般に修羅を比喩として使う場合荒ぶる者、凄まじい者として表現する。ついさっきまでスバルを思って鍛えてくれたアユムが、そんな恐ろしい物を体の中に考えられなかった。

「羽々に……いや、圓明流の血を引く者は全員修羅を宿しながら生まれる」

まるで他にも圓明流があるかのような口ぶりが気になったが、結局スバルは何も聞けずにアユムと別れた。まだ聞きたい事とかあったが、これ以上話していると睡眠時間がなくなると言われ、仕方なく寮に戻る。

早く寝ようとベッドに潜り込んだが、なかなか睡魔はやって来な

かった。理由は分かってる。アユムが修羅という単語を、口にする時に見せた表情が気になっているのだ。なんであんなに泣いたような、笑ったような表情をしていたのだろう。

足りない頭を総動員しても分からない。そもそも問いを出しても答えを持つのはアユムなのだから、この考えは時間の無駄でしかない。その事に気づいた時にはもう丑三つ時を過ぎていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4442x/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜修羅の少年〜

2011年11月4日22時47分発行